

すみれ 令和4年1月度特別作品

蝶の庭 すみれ

私は「保育士」として働いた。仕事と好きを両立し、友達も得て、振り返ると良い人生を過ごしたと思う。就職する時は、働いて給料を頂き、自分で生きてゆくと決心だけだった。親から自立することがなにより親孝行だと思いい、そのことだけが嬉しく、働く厳しさなど知る由もなかった。その第一歩を踏み出した時の喜びや不安を俳句にした。

連絡帳書けず見てゐる蝶の庭

転んでは泣く子の春の土払ふ

風船を部屋いつばいに子の弾く

父の字で小包届く暮春かな

五月晴子の呟きを書き留めて

帰省する便りし父母へ土産買ふ

青葉して職場に向かふ足軽し

園児らと汗だくになり散歩道

園児らを昼寝させ我居眠りす

勤務終へコーラス会へ夏の夜

《作品鑑賞》

亜矢

「蝶の庭」は、新人の保育士が詠んだかのごとく、実に瑞々しく、ひたむきさが伝わってくる作品である。作者が昔を懐かしんで詠んだというより、かつての自分を甦らせたように思えた。

連絡帳書けず見てゐる蝶の庭

保育士なりたての頃だろうか。保護者との連絡帳に何を書いているかわからない。蝶の舞う庭には子供はおらず、静まり返っている。作者の切ない気持ちの痛いほど伝わる。

転んでは泣く子の春の土払ふ

幼い子たちはよく走りよく転ぶ。泣いたげに、服についた土を払ってやる作者。春への喜びにあふれた句。

勤務終へコーラス会へ夏の夜

職場に慣れ、心の余裕ができた頃か。仕事帰りのサングラスをかけた夜も、コーラスをしている間は、心身ともに爽やかだったことだろう。

秋沙 令和4年1月度特別作品

縮景園 秋沙

この度、特別作品を作るにあたり、私の住む牛田から徒歩で二十分ほどの縮景園を選びました。俳句を始めて以来、句村を求めては訪れ、四季折々の自然の変化に気づき、感動して俳句を詠んできた場所です。最初の句は、開園の時、守衛の方が冠木門を開けられる姿を詠んだものです。俳句に行き詰ったとき、泉水のベンチに座ると心が安らぎます。

春光や門を抜く冠木門

堰落つる水の音して春立てり

芽き替のこけらの屋根に春の雨

白梅の仄かに匂ふ昼の園

夕暮の空に一輪梅の花

吾が影と重なり泳ぐあめんぼう

水の斑の揺らぐ四阿花あやめ

泉水の跳ぬる真鯉や晚夏光

今日の月木立の中を昇りけり

泉水に映りてゐたる薄紅葉

《作品鑑賞》

村上正人

縮景園は広島藩藩主 浅野長晟が築成した大名庭園がはじまりとされるが、一年を通して四季折々の木々や花々が楽しめる庭園である。作品『縮景園』の中で作者の秋沙さんは四季折々の園の景を印象深く詠まれている。それにしても徒歩二十分ほどで縮景園を訪れることができるといふのは羨ましい限りである。

春光や門を抜く冠木門

縮景園の正面入り口の冠木門。朝一番に門を抜く様子に開門を待ちわびた歓びが伝わってくる。季語「春光」がその歓びを的確に表現している。

水の斑の揺らぐ四阿花あやめ

作者は俳句に行き詰ったとき泉水のベンチに座る、と語られているが、四阿から眺める揺らぐ水の斑とそこに咲くあやめに心安らぐのである。

今日の月木立の中を昇りけり

名月が縮景園の木立の中に昇る様はなんと贅沢な瞬間であろうか。もしかすると園内からの景ではなく、川を挟んだ村岸から見た園の、木立の中を月が昇る景なのかもしれない。